夏用（ポリエステル紗）

美容衿
衿元が決まるから初心者にもお薦めです

袷用（ポリエステル塩瀬）

半じゅばん
衿を付けたまま洗濯機で洗っています

裾よけ
絹とネルの2種類あれば夏も冬も快適

衿から胸元までのラインを整えてくれる美容衿。そのまま「うそつき衿」としてゆかたの下などに着用でき、着物の下なら長じゅばんにかけて使えば、付け替えがらくで重宝する。衣紋抜きが付いているので美しい着姿がかなう。塩瀬と紹の2種類がある。

美容衿
各4400円（税込み）

着物スタイリストの大久保信子さんが監修した半じゅばん。綿麻のワッフル素材でできた身頃は肌離れが良く着心地抜群。季節に合わせた半衿をかければ1年を通して着用できる。袂（たもと）からちらりとレースが見えるのが何ともおしゃれ。

大久保信子流レース袖半じゅばん
1万780円（税込み）～

裾よけは、肌に心地よく、裾さばきが快適なものを選びたい。京都の名店が手がける絹の裾よけは、肌離れが良くさらりとして気持ちが良い。絹の裾よけは通年で使えるが、真冬の寒い時季にはネル製がお薦め。軽く起毛したネルは、やわらかな肌触りで保温・保湿性に優れているので、腰まわりから足元までを寒さから守ってくれる。

正絹裾よけ 精華
1万4300円（税込み）～
綿ネル裾よけ
3850円（税込み）～
お買い上げは→113頁

着物を着続けて二十余年。三砂ちづるさんは、教壇に立つときも日々の暮らしでも着物に親しんできた。「毎日のように着るものですから、シンプルに心地よく過ごせるのが一番です」

着物を着ようと決めたとき、「着物メンター」ともいえる友人があらゆるアドバイスをくれたという。できるだけ手間をかけずストレスなく、毎日着ても苦にならない。そんな着物との暮らしを続けるために薦められたのが、美容衿と半じゅばんの組み合わせだ。「最初にこの『技』を教えてもらって本当に良かった。20年以上お世話になっています」。半じゅばんのお供には裾よけを使う。通常は絹を、真冬はネルで防寒。「ネルは、友人がわざわざ手づくりして贈ってくれたこともあります。ありがたいですね」

着物は体に優しいもの。三砂さんの着姿はそれを体現するように自然体だ。「本来の着心地を引き出したいから、肌着も着物用を選びます。洋服用ではどうも心地がよくなくて」

着物を愛し、呼吸をするようにまとう三砂さんは、この春、沖縄に拠点を移した。「沖縄にはウシンチーという着方があります。帯を使わず紐だけでゆったり着る。素敵な着姿なのです」

新たなステージでの着物ライフが、楽しみで仕方がない。

20年にわたって教鞭（きょうべん）を執った津田塾大学を、この春「卒業」。着物で教壇に立つ姿は学生たちの間でも有名だったとか。ふだんは紬（つむぎ）や木綿を、入学式や卒業式、結婚式には色無地や色留袖を着て。思い出深い大学を去り、2024年からは沖縄で新生活をスタート。

銀のジーファー（かんざし）は沖縄の金細工名工・又吉健次郎さんによるもの。40年近く前に購入して以来、大切に使っている。「本来は、神役の女性が着けるものなのだそうです」